体験イノベーション　「せとうち母家」の講演

2020 年6月 23 日，7時間目に４年生を対象に，せとうち母家の岡田臣司さんを講師としてお迎えし，「共生」と「循環型社会」をテーマにご講演いただきました。

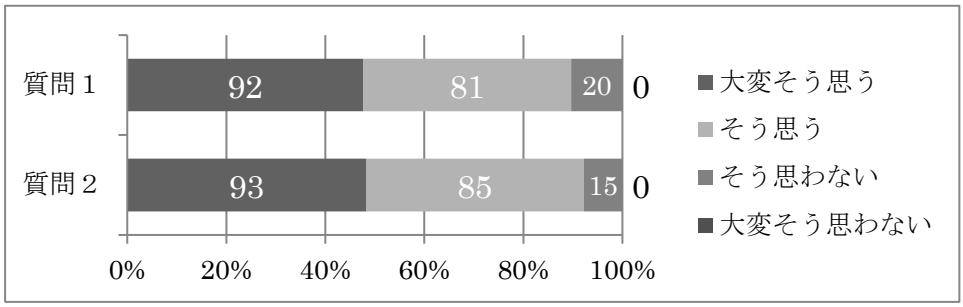
岡田さんは本校を卒業後，北海道での１年間の酪農実習や，アメリカのイエローストーン国立公園における３年間のパークレンジャーアシスタントの活動，学習塾での英語講師としての経験などを生かし，福山市熊野町で里山の豊かな自然体験を提供する活動を展開されています。築 150 年を越える古民家をリノベーションして「せとうち母家」という民泊を始められました。雑木林や水，動物，などの里山資源を最大限に生かした Edible Satoyama Activities の実践や，野菜や蜂蜜などを収穫し，そこから出た残飯や落ち葉などをコンポスト(堆肥)として再利用し，再び畑にまく，というような循環型の生活の一部を体験化したワークショップなどの提供も行われています。

講演では，里山に広がる食の世界の魅力について，たくさんのスライドや，関連する書籍などを紹介しながらお話をしてくださいました。生徒からの「一番私たちに伝えたいメッセージは何になりますか？」という質問に対しては，「『共生』や『循環型』の生活を実践し，この先少しでも持続可能な社会を作ることに貢献してほしい」とお答えいただきました。講演後にも，数人の生徒が残って直接質問をしていましたが，生徒一人ひとりに対して熱心にお話をしてくださいました。

講演後の生徒のアンケートをまとめると以下のようになりました。

質問項目
１．今日の講演は興味・関心をもって聞くことができましたか。
２．今日の講演は新しい考え方や視点が学べるものでしたか。

集計結果
＊総数 193



〔生徒の感想〕

○まず今回の話の中で，環境と食が結びついているというのが面白いと感じました。食というのは環境から生まれるものなので，切っても切れないつながりがあるのは明白ですが，あまり食育の観点で環境について触れたことがなかったような気がします。そこにこそ「地産地消」や「オーガニック」が良いとされる理由があるだろうと思いました

○かつて里山に人の手が入っていた頃に実現されていた自然との共生を再現するには，植物や動物の管理など，様々な工夫が必要だということがわかった。一方で実際の社会では，人口の都市集中や農業，流通の自動化，機械化が進み，消費者が食べ物を通しての自然環境とのつながりを自覚しにくくなっていると思う。人は効率や便利さを追求するあまり，人として欠かせない生命活動をおろそかにしていないだろうかとも考えた。岡田さんがおっしゃるように「小さな一歩」こそ大切だが，具体的にどうすればそれが実現できるのか，今後の学習を通して熟考してみたい。

○国立公園の助手，土木関係，塾講師，デザインなど，せとうち母家を経営するまでにたくさんの分野で働かれていたことに驚いたが，その経験が今の里山での多岐にわたる活動の基盤になっているのが感じられた。「自然を大切に」「持続可能な社会」などのような言葉を言うのは簡単だが，実際にそれを実践されている力の原動力を知りたいと思った。

○今まで私たち人間は，生態系を再生したり作ったりするのではなく，壊しているのだと考えていましたが，生態系や環境を作り出すことができるのだと考えました。このことから私は，生態系環境を守ることができるかどうかは自分たちにかかっているのだと実感しました。そのためにとれる方法はたくさんあり，どうすれば環境を作り守ることができるかを考えることが共生なのだと思いました

○何にでも目を配り，自分の経験を含めて何でもやってみようと試みる。そういった行動も身につけるべきだと感じました。一石二鳥が何鳥にでもつながり増えていることが岡田さんのご努力の結果だと思います。そしてまだ続いている。人脈や知識や発想など全ての力によるものだと感じました。

○環境が食に直結しているため，自分たちの身体は「環境」でできていると言っても過言ではないことがわかりました。“No plants, No Life!”ということばを知れたので，自分も植物に対する感謝を忘れず，これをきっかけに自分も環境についてしっかり考えようと思いました。

○Gap year を活かしてアメリカや北海道で多くの自然を体験し，日本に戻ってきてから耕作放棄地や里山の自然資源を有効的に活用しているという話が印象的でした。自然との共生を目指している事業にはこれまで出会ったことが少なかったので，それもとても新鮮だった。これから社会に出たときに，役立つよう自然と共生していく中での経験や新しい視点の探査を積極的に行っていきたい。将来，循環型の持続可能な社会を目指してこれから様々な経験を積んでいきたい。

○「食」＝「環境」だからこそ地産地消の安全で責任の所在がはっきりした食べ物を追求することが重要である。耕作放棄地を解消するなど自然と深く結びついたことを仕事にしていて，生まれ育った環境にとても貢献されているように感じ，すごいと思った。環境破壊が進む中，「人と生き物がともに暮らす自然」である里山は，持続可能な未来を考える上で非常に大切だと思う。改めて「自然」に目を向けて，職業として考えるのもいいなと感じた。20 年後，今見られる植物や動物を同じように自然の中で見られるように守っていきたい。

○「挑戦すること」はとても大事なことなのだと思う。福山附属の卒業生の人たちは，起業したり新しいプロジェクトを立ち上げたりしている人も多くいるし，そのような人々が協力し合っていることも講演内容からよくわかる。ここで得られるつながりは，生涯大事にできるものなのだと思った。また，お話を聞いていると Gap year ギャップイヤー期間中に学んだことや経験を最大限いかして，色々なことへチャレンジされているように思う。私はできるだけ早く大学に行って就職するのが 1 番良いと思っていたが，そうではないのかもしれない。海外に行ったり，普通ではできないような体験をしたりしておくことが新しい発想や視点を養い，将来の充実につながるのではないかと思った。

○自然と共生することで，私たちの生活も豊かになる。「地産地消」を掲げる人は多いけれど，せとうち母家さんは，本当に様々なところに目を向けていて，「地産地消」を超えた域にあると思った。自然から何かを得るだけでなく，自然を守る活動をすることで，本当の意味での「共生」を目指していた。また，その活動を一般の人に広げているのもすごいと思った。